

イエスの招き — ファリサイ派の人々や律法学者たちは イエスの福音の対象外だったか

本 多 峰 子

イエスの福音は、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(マルコ1:15)という、彼の使信に集約されよう。彼は、その福音が彼を通して実現しつつあることを、癒しと教えと奇跡によって、示そうとしていたのだと、われわれは福音書に記されている彼の行動から読み取ることができる。そして彼の死後、彼の弟子たちは、その福音の究極的な実現が、十字架の死と復活によって保証され、キリスト教徒が待ち望んでいる終末に成就すると、考えてきた。

イエスは、貧しい者、罪人と言われている者と食事を共にし、彼がもたらした救いはしばしば、貧しい者、罪人のためのものであったと考えられる。そして、その正しさは、福音書においてだけでもいかに多くの貧しい人々、病によって人間的な生活を不可能にされていた人々、収税人などといった、当時罪人と見なされていた人々がイエスとの出会いによって救いを見出したかが、記されていることを見れば一目瞭然である。彼が、「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」(マルコ2:17: 並行記事マタイ9:13も参照)と言った言葉はよく知られており、同様に、「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」(ルカ18:24-25と並行記事マルコ10:24-25, マタイ19:23-24) もしばしば引用される。しかし、それを進めて、イエスの福音が、そうした罪人たち、貧しい人びと、病める者たちだけのものと考えらるならば、それは誤っているであろう。また、イエスを信じなかったユダヤ教の人々は、イエスを十字架に追いやったかどで、その死の責任があり、それゆえ、救わ

れないと、キリスト教では考えてきたが、それも誤りである。近年では、ユダヤ人がキリストを殺したことでいわば〈神殺し〉の罪を負っており、救われない民であるという考えは、反省されており、それが、そもそも最初からあったものではなく、2世紀のサルディスの主教メリトが始めたものであるということも、再認識されている¹⁾。また、イエスの処刑はユダヤ人によるのではなく、ローマの手によってであることも歴史的に明らかである。カトリックでは、第二ヴァチカン公会議で、18世紀間も続いた偏見と差別を撤回し、ユダヤ人に対する拒絶、非難、迫害は、聖書に根拠をもたず、教会の立場とも反すると宣言している²⁾。それゆえ、イエスとユダヤ人との対立といった概念は、すでに過去のものになっていると言ってもよい。実際、改めて聖書に向き直ってみると、使徒言行録には、イエスの死後、ファリサイ派の人々の中にもイエスを信じるようになった者が少なからずいたことが示されている(15:5)。また、イエスが自分の福音を、彼の論敵であるファリサイ派の人々、律法学者たちに対しても向けて訴えかけていたこともわかる。貧しいどころかおそらく極めて裕福なユダヤ教の上流階級の人々も、彼の福音宣教の対象であったこともわかる。今まで、ユダヤ教の人々とイエスとのそうした関係は、主として組織神学の観点から述べられてきており、実際の宣教現場などで用いられる聖書のテキストの釈義にはまだ十分反映されていないように見えるので、本論では、福音書の本文に立ち帰って、改めてそのことを見直したい。

I 時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい

「時は満ち、神の国は近づいた」は、ギリシア語聖書の定本となっているネストレー＝アーランド版(27版)の原文では πεπλήρωται ὁ καιρὸς καὶ ἤγγικεν ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦとなっている。「時が満ちた」と訳されたこの、「時」καιρὸς は、質的な重要性を持つ「時」の概念である。何かを行うためにふさわしい時、決定的な時の一点を示し、むしろ量的な一定の時間や期間を表す χρόνος と異なる³⁾。そして、その「時」が「満ちた」と訳されている動詞 πεπλήρωται (πληρῶ = 満たす、成就する、の現在

完了受動形：受動形であるから、神によって満たされたという含意があるかもしれない) は、時称が現在完了形であるから、むしろ「満ち満ちている」と訳して、今この時点の質を表現するものとして読むべきであろうと、大貫隆は示唆している⁴⁾。

「神の国」 ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ とは、「神の支配」と訳すこともできる。イエスの言葉として「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない」(ルカ17:20-21) と記されているが、神の国とは地理的な意味での国ではなく、神が「王として支配する」(動詞 βασιλεύω) 状況をさす。そのような状況の成就の時が迫っていると、イエスは訴えている。

そこに続く「悔い改めて福音を信じなさい」は μετανοεῖτε καὶ πιστεύετε ἐν τῷ εὐαγγελίῳ. であるが、この μετανοεῖτε (二人称複数命令形) の動詞 μετανοέω は、μετα = back, again + νοέω = observe, notice, to be minded to do (a thing)⁵⁾ であるから、再び認識する、立ち帰って新たな意思を持つ、というような意味になる。それゆえ、この、悔い改めとは神への立ち帰りのことであり、日本語での語感が示唆するような、罪を悔いるとか、反省するということがその根本的な意味なのではない。また、「福音」 εὐαγγέλιον は、「よい知らせ」という意味であり、その内容が、神の国の到来による救いであろう。イエスは、自分のこの世での働きとともに神の国の支配が始まりつつあり、われわれは、後延ばしせず今、この時、神へと立ち帰って救われる道を選択すべきであると招いた。その招きが、彼の福音のメッセージの根幹である。神の国の到来を、彼は、時には癒しの業によって、時には教えと問答によって、時には譬え話によって、宣教した。そこで、われわれは、そのおのおのの側面でのイエスの、ユダヤのファリサイ派、律法学者、金持ちの人々などに対する態度を見てゆきたい。

II 癒しの奇跡

神の国の支配のこの世での始まりを明らかに示すものとして、彼は、多くの癒しの奇跡を行った。(福音書や使徒言行録、特にヨハネによる福音書では、しばしば

4 イエスの招き

<しるし> (ヨハネ4:54, 6:2その他) と言われる。) 当時、病気は罪に対する神の罰と考えられたり⁶⁾、病人は、汚れているとして他から避けられたりしていた。それゆえ、これらの人々の癒しは多くの場合確かに、罪人、汚れた人々の救いであった。これらの人々は、だれよりも明白に救いを必要とする人々であり、その救いが与えられたのである。

しかし同時に覚えておきたいのは、イエスに癒された人々の中には、貧しい者だけではなく、裕福な、しかもユダヤ教のシナゴグの会堂長のような地位の者もいたことである。マルコ5:35-43とその並行記事(マタイ9:18-26、ルカ8:49-56)に記されている、死んでしまった娘を蘇らせた奇跡は、その父親である会堂長ヤイロの願いと信仰に答えたものであった。ヤイロはユダヤの社会の中では罪人の範疇にも汚れた人間の範疇にも入らない。だから、いまさら書く必要がないほど明白なことだが、たしかに、イエスに救われた者の中には、多くの階層の者がいたのである。そして、イエスの救いの手が多くの場合貧しい人々に真っ先に伸ばされたとすれば、それは、裕福な者に対する拒絶からではなく、むしろただ貧しい人々の中に、より多く、救いを緊急に必要とする人々、救いを求めに来る人々が多かったからであり、イエスがそのような人々の来やすい場所で活動していた(そのこと自体は意味があるが)からだ、と考えられる。イエスのもとに来て癒されたのが貧しい病人だけであるとは、福音書には書いていないのであって、たとえば、人々が「どこでもイエスがおられると聞けば、そこへ病人を床に乗せて運び始めた。村でも町でも里でも、イエスが入って行かれると、病人を広場に置き、せめてその服のすそにでも触れさせてほしいと願った。触れた者は皆いやされた」(マルコ6:55-56)とある箇所でも、癒された人々の地位や貧富については何も語ってはいない。福音書で貧しい人々、罪人と言われる人達の癒しや救いがとくに問題になるのは、それまでそうした人々がユダヤ教の律法の基準では救われなかったところが、イエスによって救われたという革新的なことによるのである。そして、実際、ユダヤ教の救済論とのその違いは強調しすぎることはないほど、重要である。ただし、申命記には孤児や寡婦など、弱者への配慮が命じられており(申命記14:29、24:17-21、26

: 12-13、27:19)、また、イスラエルの民が神に愛され、選ばれたのは彼らがどの民よりも貧弱であったからだ(申命記7:7)記されているのであって、ユダヤの神が貧しい者の、弱者への愛の神であるということは、旧約聖書の本質的な部分のひとつである。たしかにイエス時代のファリサイ派の人々は、徴税人、遊女、羊飼い、豚を飼う者、強盗、詐欺師、姦淫した者、異邦人、サマリア人らを、「神の赦しを期待できない」者たちと考へて、救いを一部のユダヤ人に限っていた⁷⁾という指摘があるが、そうならばそれは、(旧約)聖書の真の心から離れていたということである。それに対して、イエスは、積極的に、そうした赦しと救いの道を閉ざされていた人々と交わり、救いの手を伸ばしたのである。しかし、こうした人々が救われたことが、かならずしも即、それ以外の富める人々に対する救いの拒絶に通じることではない。たしかに、福音書も、特にルカは、貧しい者の救いを強調し、時に、金銭的に富んでいる者は救われないような印象を与える。しかし、後に見るように、ことにその点を強調する書き方は、ルカの編集による場合が多く、イエスの真正の言葉であったかどうかは疑問に思われる。ルカの、「貧しい人々は、幸いである、／神の国はあなたがたのものである。今飢えている人々は、幸いである、／あなたがたは満たされる。今泣いている人々は、幸いである、／あなたがたは笑うようになる」⁸⁾(6:21-23)とある箇所をマタイは、「心の貧しい人々は、幸いである、／天の国はその人たちのものである。悲しむ人々は、幸いである、／その人たちは慰められる」(5:3-4)と、精神的な心の貧しさに理解しているが、マタイがルカよりも間違っているということはないであろう。イエスは、罪に関して、実際に罪を犯すことと同じだけ、心の中で犯した罪をも深刻なものとして戒めている。「あなたがたも聞いているとおり、『姦淫するな』と命じられている。しかし、わたしは言う。みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、既に心の中でその女を犯したのである(マタイ5:27-28)」。そして、心の内面に目を向ける彼の視点を考えるならば、心の貧しさは、物質的な貧しさと同じくらいに、救いを求める要請という点では切実である。

Ⅲ ファリサイ派の人々や律法学者との論争

次に、福音書に記録されている、ユダヤ教のファリサイ派の人々や律法学者とのイエスの論争を通して、彼の福音宣教を考えたい。カトリックの公式の見解には、福音書に記されているファリサイ派との対立は、イエスの時代よりも後の、キリスト教徒とユダヤ教徒との関係が悪化した時代の状況を反映しているものであり、イエスと彼らとの実際関係を確かに知ることはしばしば困難であるが、イエスがユダヤ教の分派の中ではサドカイ派などよりはファリサイ派に近く、その中でも当時有力であったヒレル派（律法を比較的寛容に適用する）とシャンマイ派（律法を比較的文字通りに解釈する）のどちらかと言えばヒレル派に近かったという指摘がある。カトリックの指針としてはさらに、新約聖書に見られる対立のいくらかは、ファリサイ派の仲間内で行われている討論を反映しているであろうという⁹⁾。そこで本論では、試論としていくつか例を取り上げて、彼の間答が実際しばしば、律法学者やファリサイ派などの人々との激しい対立を示すように見えながら、決して敵対するものではなく、彼らに対してさえも招きを含んでいたということを確認したい。

第一は、ヨハネによる福音書の、いわゆる「姦淫を犯した女」の箇所である。

8:1 イエスはオリーブ山へ行かれた。

8:2 朝早く、再び神殿の境内に入られると、民衆が皆、御自分のところにやって来たので、座って教え始められた。

8:3 そこへ、律法学者たちやファリサイ派の人々が、姦淫の現場で捕らえられた女を連れて来て、真ん中に立たせ、

8:4 イエスに言った。「先生、この女は姦淫をしているときに捕まりました。

8:5 こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうお考えになりますか。」

8:6 イエスを試して、訴える口実を得るために、こう言ったのである。イエスはかがみ込み、指で地面に何か書き始められた。

- 8:7 しかし、彼らがしつこく問い続けるので、イエスは身を起こして言われた。「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」
- 8:8 そしてまた、身をかがめて地面に書き続けられた。
- 8:9 これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとりと、真ん中にいた女が残った。
- 8:10 イエスは、身を起こして言われた。「婦人よ、あの人たちはどこにいるのか。だれもあなたを罪に定めなかったのか。」
- 8:11 女が、「主よ、だれも」と言うと、イエスは言われた。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」(ヨハネによる福音書8：1-11)

この話は今日の聖書学では、元来ヨハネ福音書のものではないと見られている。その理由として、第一にヨハネ福音書の相当数の写本がなく、ある写本では別の位置におかれ、ルカ21：38の後に来ている写本もあるということ、第二に、非ヨハネ的用語を用いていること — たとえば、「律法学者」や「オリーブ山」はヨハネではここにしか出てこない — などが挙げられている。内容的に見るとこの物語は罪人の友としてのイエスという共観福音書的な話の系列に入る。(cf.ルカ5：29ff、15：1ff、19：1ff.)¹⁰⁾。しかし、このことはこの伝承の信憑性を減ずることにはならないであろう。むしろ、この伝承が福音書とは別に確固とした形で伝わっていたこと、その内容の重要さが、あえて後代の編集者をして、この話をここに置かせたと考えられる。

多くのユダヤ教のラビは、町や神殿の境内で教えていた。イエスもこの日、集まってくる人たちに教えに行ったのであろう。「民衆が皆、御自分のところにやって来たので」、という節は、このときすでにイエスの評判はかなり高くなっていたことを示す。そこに、律法学者やファリサイ派の者たちが、この女を連れてきた。そして、この女が姦淫をしているところを捕まえたが、モーセの律法によって、石打

の刑にすべきか否かと、イエスに判断を求めた。これは、申命記の22章に、「男が人妻と寝ているところを見つけられたならば、女と寝た男もその女も共に殺して、イスラエルの中から悪を取り除かねばならない。ある男と婚約している処女の娘がいて、別の男が町で彼女と出会い、床を共にしたならば、その二人を町の門に引き出し、石で打ち殺さねばならない」(22:21-24)と書いてあるからであり、もう一箇所、レビ記にも、「人の妻と姦淫する者、すなわち隣人の妻と姦淫する者は姦淫した男も女も共に必ず死刑に処せられる」(20:10)と書いてある。しかし奇妙なことに、姦淫の現場で捕らえられれば、律法によれば男も女も両方が石打ちにされるべきなのであるのに、ここでは相手の男は連れられてきていない。なぜこのようなことがあったのかと言えば、この女の人によほど、相手の男と比べて社会的に弱い立場にいて男のほうだけは金の力でか権力でか律法の罰を逃れる力があつたが、女の方は力なく、助けてくれる人もなくここに連れられてきたのか、あるいは、男はただすばやく逃げてしまったのかもしれない。いずれにしろ、男の方は、この女と運命をともにするつもりなどもともとなかつたか、あるいは、つかまつた時点で恐怖に負けて女を見捨てて逃げたのであろう。それゆえ、この女は、まったく孤独に、一人で引かれて来たに違いない。自分の犯した罪を恥、後悔し、自分ひとりだけがこうして皆の前に引き出されていることに対して、見捨てられた絶望と、殺されるかもしれない恐怖で、震えていたに違いない。そのようなこの女の人を、律法学者とファリサイ派の人たちは、容赦なく皆の真ん中に立たせて、イエスに裁かせる。彼らが律法と異なり、男の人を連れずに彼女一人をつれてきたやり方から、「イエスを試して、訴える口実を得るために、こう言った」とあるとおり、彼らの目的は実は律法に従うにはどうすればよいか、ということではないとわかる。彼らの目的はイエスを陥れることにあつた。もし、イエスが、この女を石で打てと言えば、今まで娼婦や弱い者たちの味方だという評判が立っていたイエスが、結局は容赦ない裁き手だったということになり、彼の人気を落とすことができる。あるいは、うまくして、イエスが、女を石で打つなと言えば、彼らはイエスが律法に反対していると言って、イエスを訴えることができるであろう。どちらに転んでも良いように、

彼らはイエスをわなにかけようとしたのである。

それに対し、イエスは黙って、地面にものを書き始めた。これは、当時の地中海地方では、自分が相手の話に関心だと言うことを示すか、相手の話を拒絶するしぐさだという¹¹⁾。律法学者やファリサイ派の人たちは、馬鹿にされたも同然であるから、躍起になって聞き続ける。そこで、イエスが言ったのである。「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」少ししか罪を犯したことの無い者、ではなくて、全く、罪を犯したことの無い者、と、彼は言った。そしてまた、身をかがめて地面に書き続けた。これは、これでもう話は終わりである、後は自分で考えろ、というジェスチャーであり、非常に挑戦的でもある。通常のプライドのある人間ならば、怒ってしまうであろう。しかし、ここで、それまでイエスをわなにかけようと悪意に満ちた思いでいた律法学者たちの態度ががらりと変わる。彼らは、イエスの言葉を真摯に受け取り、自分たちの今までのあり方を思い、反省して、一人、また一人と、去って行った。それも、年長者から先に。この、年長者たち (πρεσβυτέροι) というのは、いわゆる年をとった人、というよりも、教会で言う長老のような位置にいるユダヤ教の指導的な、おもだった人たちと考えられる。ユダヤ教の中では、他からも尊敬された、敬虔で神を恐れる立派な人たちであろう。しかし、そのような者たちが、まず、自分が罪を犯してきたことを悟り、それを、立ち去るという態度で告白したのである。ゲイル・R. オデイが指摘しているように、ここで、イエスはその女と律法学者とファリサイ派を社会的、人間的同等者として取り扱っている。イエスは、律法学者、ファリサイ派の人々とその女性との両方を、今、この瞬間に新たな生活を始めるように招いている。彼らは古い生き方を捨てて、新たな生き方に入るように招かれているのである¹²⁾。イエスが、この女に、「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない」と言ったことの意味は、決して無罪放免の宣言ではない。

「もう罪を犯してはならない」との諭しから分かるように、これは、罪を認めた上での赦しである。罪に定めるということ(κατέκρινειν)は、相手に決定的に罪人の焼印を押すということ、死罪に値する宣告を下すことであり¹³⁾、終末論的に言えば、

最後の審判の時にも罪人として裁きを下すということである。どこまでいっても罪人として扱い、救いの余地を残さないということである。そうではなく、ここで、「私もあなたを罪に定めない」というのは、これからはあなたは罪人ではない人生を送れるのだ、という招きである。「行きなさい。これからはもう罪を犯してはならない」というのは、そういう意味での派遣である。イエスはここで、生きている限り、けっして、自分を悪に明け渡してはならないという、戦いへの呼びかけをしているのである。この女は、もう一度生まれ変わってやり直すことを課題として与えられ、新しい人生に送り出されていった。そして同じこの日、律法学者とファリサイ派の人々は、キリスト・イエスの言葉を深く受け止めて、自分たちの独善的な生き方を改め、真に謙虚な信仰生活にむけられたかもしれない。それは、ひとつの大きな転換であり、彼らは、生まれ変わったかもしれない。律法学者とファリサイ派の人々に対しても、この日のイエスとの出会いは、真の自分を改めて (μετα) 知る (νοέω) という意味での文字通りの〈立ち帰り (μετανοέω) =悔い改め〉を促すものとして働いたと言える。イエスが、「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」(マルコ2:17とその並行記事マタイ9:13, ルカ5:32) という言葉の奥には、自ら義人を自負する人々も、やはり罪人であり、それに気づいていないだけなのだということ、そして、まず、自分の罪や罪責を自覚し、立ち帰ることが必要なのだという招きが、ここから読み取れる。

第二の例として、ファリサイ派の人々と律法学者がイエスに、なぜイエスの弟子たちは律法に従わずに手を洗い清めないで食事をするのかと問い詰めたとき、イエスがこのように応酬している箇所も、ただ責めているだけではないことに注目したい。

7:1 「人を裁くな。あなたがたも裁かれないようにするためである。

7:2 あなたがたは、自分の裁く裁きで裁かれ、自分の量る秤で量り与えられる。

7:3 あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。

7:4 兄弟に向かって、『あなたの目からおが屑を取らせてください』と、どうして言えようか。自分の目に丸太があるではないか。

7:5 偽善者よ、まず自分の目から丸太を取り除け。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からおが屑を取り除くことができる。」(マタイ7:1-5:ルカ 6:41-42の並行記事も参照)

これは、他を罪人として裁き、自分こそ救われると自負しているような信仰誇りの人々に向けた弾劾の言葉ととらえられる。D. A. ヘアが指摘するように、マタイによる福音書では「偽善者」という言葉は通常、ファリサイ派の人々とその律法学者たちにかかわる¹⁴⁾。ここでも「偽善者」とは、まず第一にその最たるファリサイ派の人々をさすのであろう。兄弟の目からおが屑を取り除くことは、宗教的な指導者としての彼らに期待されている役目だからである。しかし、ヘアが続けて言うように、ここで言われている「偽善者」は、ファリサイ派の人々に限られることなく、偽善的なあらゆる酷評家に向けられていると見るべきであろう¹⁵⁾。しかも、これはただの弾劾ではなく、まず、自分を省みて、しかるべく他の指導者になるようにという、招きの言葉である。

第三に、先に見た、「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」(ルカ18:24)の並行記事である、マルコによる福音書10:17-27を見たい。これは、マタイ、ルカの資料として用いられたと考えられ、イエスと青年とのやり取りとしてはルカよりさらに、元の形に近いと思われる。

10:17 イエスが旅に出ようとされると、ある人が走り寄って、ひざまずいて尋ねた。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」

10:18 イエスは言われた。「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもない。

10:19 『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』

という掟をあなたは知っているはずだ。」

10:20 すると彼は、「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と言った。

10:21 イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」

10:22 その人はこの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである。

10:23 イエスは弟子たちを見回して言われた。「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。」

10:24 弟子たちはこの言葉を聞いて驚いた。イエスは更に言葉を続けられた。「子たちよ、神の国に入るのは、なんと難しいことか。」

10:25 金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」

10:26 弟子たちはますます驚いて、「それでは、だれが救われるのだろうか」と互いに言った。

10:27 イエスは彼らを見つめて言われた。「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ。」

イエスが「見つめ、慈しんで」というのは、マルコの脚色かもしれない。しかし、21節の「それから、わたしに従いなさい」は、はっきりとした招きの言葉であり、また、ここでは、イエスは、持っているものをすべて売り払うことを求めているわけでもない。(ルカの並行記事(18:22)では「すべて」が入っているが、それは、ルカが入れたものである。先に述べたように、ルカではマルコ、マタイと比べて、貧しい者への救いがとくに強調されている。) たとえ、この場でイエスの趣旨が全財産を貧しい者への施しとして彼に従うことであったとしても、イエスが常に、金持ちは実際に全財産を捨てるまで救われないと断言していたわけではない。金持ちの徴税人ザアカイは、イエスへの帰依と感謝の印として、持っているものの半分を貧

しい者に施す申し出をしたとき、それで十分に救いの祝福を受けることができた（ルカ19：8-9）。また、ルカに出てくる女性たちが、「自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた」（8：3）、つまり、財産を保持しながらそれで教会を支えていたことも思い出される¹⁶⁾。

また、イエスのここでの発言と近似したものが、タルムードにあることが指摘されており、イエスの、律法を知るだけでなく行うことが重要であるという態度は、ユダヤ教の基本的な態度を踏襲していたのだということが確認される。以下は、ペシクタ・ラッバーティの一節である。

イザヤは言った。「宇宙の至高者よ、人は救われるために何をしなければならないのですか？」神は彼に言った。「彼に、施しをさせ、貧しい者に自分のパンを分かち、律法を学ぶものに金を分け与えさせなさい。傲慢に振舞わせてはならない。……もし、彼がすべての者の前で謙遜であれば私は彼とともにいる。

（イザヤ57：15）確かに言うが、律法と、よい行いと、謙遜と、天への畏れを持つもの、それが来る世を継ぐのである」。（ペシクタ・ラッバーティ 198a）¹⁷⁾

金持ちの青年の場合、問題だったのは、彼が精神的に頼っているものが、神ではなく自分の財産であったこと、財産とイエスに従うこと、神の国を選ぶことの二者択一を突きつけられたときに、神の国を選ぶことができなかったことである。財産や、それに結びついた地位や名誉を第一の頼みとしている限り、それを減らすことは不安である。イエスの招きを受けたときに彼が、多くの財産を他人に分け与えることを躊躇したことは、その不安と、金銭で手に入る安楽さへの執着からであろう。それは、精神的な貧しさの表れであり、その貧しさから救われることが彼にとっての救いであり、その一歩に、今彼は招かれたのである。今まで頼ってきた富や地位に頼ることをやめて、イエスに従う勇気がここで、求められているのである。それが困難なことは、確かにここではっきりと認められてはいる。しかし、そのあとで、「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ。」と言

われていることから、その様な難しいケースではあっても、金持ちであっても、立ち帰り救いの可能性をもっていることが示されている。また、ルカやマルコで、「財産を持ったものが」天の国に入るのは難しい、となっているところは、マルコでは「子たちよ、神の国に入るのは、なんと難しいことか」と書かれていたことにも注意したい。マルコでは、金持ちだけに限らず、「子たちよ」と、呼びかけられる弟子たちすべて、つまり、われわれの問題としても、この言葉は語られているのである。申命記には、もし神に従い、その戒めを守るならば、子どもも、実りも、家畜も、祝福を受け、他人に貸すほどに豊かになると教えられており(28章)、その伝統では、金持ちは神に祝福された者と考えられていた。それゆえ、イエスがここで、金持ちが神の国に入ることは難しいと言ったことは、非常な逆説であり、金持ちでさえも救われるのが難しいのならば、いったい誰が救われるのだろうか、弟子たちに思案させたのである。弟子たちは、これを、自分たちの問題として受け取ったに違いないのである。そこでは、金持ちと、貧しい者たちとの境は除かれてしまっている。

IV イエスの喩

J・エレミアスは「福音書の譬えはすべて、福音の擁護論である」と述べ¹⁸⁾、特に、多くの喩えが弟子に対してではなく、彼に論争を挑んできたファリサイ派の人々や律法学者に対して語られていることにわれわれの注意を促している¹⁹⁾。もし、そうであれば、その譬えは聞き手であるファリサイ派や律法学者にまず、自己変革を迫ったであろう。ここでは、しばしば誤解を受けるぶどう園の労働者の譬え(マタイ 20:1-16)を考えてみたい。

20:1 「天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。

20:2 主人は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。

20:3 また、九時ごろ行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、

20:4 『あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう』と言った。

20:5 それで、その人たちは出かけて行った。主人は、十二時ごろと三時ごろにまた出て行き、同じようにした。

20:6 五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、

20:7 彼らは、『だれも雇ってくれないのです』と言った。主人は彼らに、『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言った。

20:8 夕方になって、ぶどう園の主人は監督に、『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい』と言った。

20:9 そこで、五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取った。

20:10 最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていた。しかし、彼らも一デナリオンずつであった。

20:11 それで、受け取ると、主人に不平を言った。

20:12 『最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとは。』

20:13 主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。』

20:14 自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。

20:15 自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。』

20:16 このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。』

ヨハネによる福音書はキリスト・イエスをぶどうの木にたとえ、彼につながっているものに命を約束している。ここでわれわれが見る譬えはマタイにあり、神をぶどう園の主人にたとえ、われわれ人間を、そのぶどう園の働き手と考えている。この譬えでは、しばしば、最初から働いていた労働者がユダヤ教の人々、後から来た労働者が、後から現れたキリスト教徒と解釈されるが、その解釈をつらぬこうとするならば、ユダヤの人々も、キリスト教徒も、ともにこのぶどう園に招かれていると読むべきである。また、U・ルツは、このぶどう園を中規模農場と見る。主人自身が日雇い労働者を雇いに出ているからである²⁰⁾。しかし、むしろこれは、全能の主でありながら自ら人間を探し求め、招きに来る慈愛の神の姿と考えられよう。神は創造主で、この世の全てを治める偉大な存在でありながら、時を選ばず自らこの世の広場まで出てきて人々を招く、ヘッシエルの言う「人間を探し求める神」²¹⁾なのである。そして、それは、ただ招くのみでなく、神のぶどう園で働く働き手とするためである。神の国の成就の助けをさせるためである。その働き手として先に選ばれることは、それ自体恵みなのであるが、最初に雇われた労働者たちはそれが分かっていない。自分たちが一日働き、正当な賃金をもらおうという、利害のみでつながった雇用関係で主人と自分たちとの関係を捉えている。しかし、神の関心はむしろ、最後の一人まで自分のもとに招き、平安を得させ、御国で生きることを学ばせることにある。そこで、与えられる酬いが1日につき1デナリオンであるということにも意味がある。神に与えられる報いは、1日働いて何日も遊び暮らせるほどの額ではない。しかし、その日の糧を買い、平安に暮らせるだけの配慮はなされるのである。1デナリオンは、イエスの時代の平均的な日当に当たるからである。ここで、後から来たものが1デナリオンもらえなかったら、その者たちはその日の糧にも事欠くことになるのであって、ここで、そのようなことが起こらないのは、神は人間一人一人の必要を知っており、それを満たしてくれるということであろう。また逆に、最初から雇われたものもまた、翌日の日当をもらいにぶどう園に働きに来ることが求められているのである。

この譬えで、問題になっているのは、後から来た労働者の救いではなく、先から

働いていた者たちの救いであることは明らかであろう。人間は、すぐに人と自分を比較して、「不公平だ」「自分は損している」と言いたがるものであるが、この労働者たちもその例である。彼らは、早くからぶどう園の主人に招かれて働くことが出来たということが恵みなのだということを認識していない。しかし、その彼らに主人は、「友よ」と呼びかけている。つまり、排斥してはいないのである。

この譬えの最後で、最後に見出された者にも最初の者と同じに恵みを与える神の愛が述べられていることは、確かに重要である。ユダヤ教にあるほぼ同じ筋のたとえば、後から来た人が同じだけの報酬をもらう理由が、その人が有能で、短い間に他の人が1日かかってやっただけの仕事よりも多くが出来たからと説明されており、これは、功績による正確な分配をいうたとえである（シュヴァイツァー）。『新共同訳新約聖書注解』によると、ユダヤ教のこのたとえばは325年ごろ若くして死去したラビが短い間に成した偉業をたたえるためのものである²²⁾が、同様のたとえばが古来あったとしても、イエスはこうした考え方にとらわれず、義であってもなお愛によって恵みの業を行いうる神の大きさを示していることは、明らかであろう。

しかし、問題は、この、最後の者の救いに続く、「このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる」の解釈である。この解釈は、大きくは2つに分けられ、①最初に雇われた者はユダヤ人であり、彼らは業を重視するが、最後に雇われた者にとって代わられる。②キリスト教会の中で、重要な立場を占めている人々が、他の小さな者たちと同等に扱われることを不満にする声があり、それに対する警告をこの一節は表している、というようなものである²³⁾。①の、ユダヤ人がキリスト教徒にとって代わられるという見方は、ユダヤ人が救われないということにつながるならば、誤っている。それは、少なくともこのテキストからは読み取れないからである。先のものが<後になる>ということは、後になるだけであり、天の国に入れたい、ということではないからである。ここではむしろ、自分はキリスト教徒として、あるいはユダヤ教徒として、信仰において先んじているという傲慢に対する警告として、神から与えられた労働も試練もすべて恵みとして受け取れる謙虚な者たちのほうが信仰的には先んじているということを行っているのを見ることが正し

いであろう。同様の言葉が前章末にあり、続く20章でも、「いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい」(マタイ20:27)とされているので、それらが一貫したテーマを貫いていると読むのが自然だからである。先に見たヨハネ8章の「姦淫を犯した女」の箇所で見えた長老たちも、まず自分たちの自己義認を捨てて新しく出直すことが必要だった。彼らも先のものが後になった例でありしかも、救いに導かれた例である。

最後にマルコによる福音書で、いわゆる「譬えの効用」についてのイエスの言葉とされている一節(マルコ4:11-12)を取り上げたい。

¹¹ καὶ ἔλεγεν αὐτοῖς· ὑμῖν τὸ μυστήριον δέδοται τῆς βασιλείας τοῦ θεοῦ. ἐκείνοις δὲ τοῖς ἔξω ἐν παραβολαῖς τὰ πάντα γίνεται, ¹² ἵνα βλέποντες βλέπωσιν καὶ μὴ ἴδωσιν, καὶ ἀκούοντες ἀκούωσιν καὶ μὴ συνιῶσιν, μήποτε ἐπιστρέψωσιν καὶ ἀφεθῆ αὐτοῖς.

(4:11 そこで、イエスは言われた。「あなたがたには神の国の秘密が打ち明けられているが、外の人々には、すべてがたとえで示される。

4:12 それは、／『彼らが見るには見るが、認めず、／聞くには聞くが、理解できず、／こうして、立ち帰って赦されることがない』／ようになるためである。」新共同訳マルコ4:11-12)

マルコによる福音書のこの箇所(4:11-12)は、イザヤ書6章9-10節からの引用である。エレミアスによれば、これは、ヘブライ語聖書や70人訳聖書からの直接の引用ではなく、むしろ旧約聖書のアラム語訳であるタルゲームと一致するので、マルコは、当時広くシナゴグで用いられていたイザヤ書のパラフレーズ — タルゲーム、ペシッタとして現代にまで伝わっている訳である — によって4:11-12を書いたと考えられる²⁴⁾。ただし、タルゲームは、マルコより後代に文書化されたので、マルコの引用は、直接タルゲームからなされたものではない。それゆえ、そこにある含意を読み取るためには、まず、ヘブライ語聖書のイザヤ書原典に戻るの

が良いであろう。

この箇所については、上村静が「イザヤ書6章9-10節 — 頑迷預言？」²⁵⁾として、詳しい考察をなしている。上村は、

イザヤ書6・9-10のマソラ本文

וַיֹּאמֶר לְךָ וְאָמַרְתָּ לָעָם הַזֶּה ⁹
 שָׁמְעוּ שָׁמוֹעַ וְאַל-תִּבְיִנוּ וּרְאוּ רְאוּ וְאַל-תִּדְרְעוּ:
 הַשָּׁמַן לִב־הָעָם הַזֶּה וְאַזְנֵי הַכְּבֹד וְעֵינָיו הַשֶּׁעַ ¹⁰
 פֶּן-יִרְאֶה בְּעֵינָיו וּבְאָזְנוֹ יִשְׁמַע וּלְבָבוֹ יִבִּין וְרַפָּא לוֹ:

6:9 主は言われた。「行け、この民に言うがよい／よく聞け、しかし理解するな／よく見よ、しかし悟るな、と。

6:10 この民の心をかたくなにし／耳を鈍く、目を暗くせよ。目で見ることなく、耳で聞くことなく／その心で理解することなく／悔い改めていやされることのないために。」(新共同訳6：9-10)

を提示し、この最後の部分、新共同訳では「悔い改めていやされることのないために」と訳してある箇所 **לוֹ וְרַפָּא וְשָׁב וְשָׁב** には様々な解釈がなされているとして、4つあげている。それは、

- ①マソラの **וְשָׁב וְשָׁב** ととり、**רַפָּא** にかけて副詞的に「再び」と解する。
- ②**רַפָּא** の主語を非人称と取り、事実上受動態として理解する。
- ③**רַפָּא** の主語を **וְשָׁב** の主語と同じ「民」として、再帰的に理解する。
- ④10節末尾 (**וְשָׁב** 以下) | 全体を付加として神の言葉の外に出す。

である。上村は、上記の訳はどれも適さないとして、その理由をいくつか挙げているが、それらは以下のようにまとめられる。[以下の1～の番号は本多が上村論の要約上便宜的につけたものである]：

1. マソラの **וְשָׁב** は停止形である。それは、単なる朗誦の区切りではなく、意味上の切れ目をも指している。しかし上記の四つの解釈は、その前後を続けており、マ

ソラに忠実ではない。しかも、

2. ②のように **נפנ** を非人称ととるのは難しい。非人称は不特定のどれかを暗黙の内に主語として想定しているが、聖書における癒し手は神の他にはない。ここも明らかに癒し手は神である。

3. ③のように再帰的にとることは出来ない。カル態の **נפנ** が再帰的に使われる用例はなく、また、**נפנ** にはニファル態もヒットパエル態もあるので、それを使った。

4. 70人訳もこの動詞 **נפנ** を一人称に訳して神自ら「私は癒す」という意味にしているが、これは、この動詞の主語を神と理解したこと、つまり能動の意味に捉えたことを示している。(テキストそのものの変更を許されない9-10世紀のマソラ学者は直前の **ושב** を停止形とすることで、これを神の行動とするために、神のせりふの外に出している。)

それゆえ、マソラに忠実に訳すならば、10節後半は「それ(民)がその目で見ることなく、その耳で聞くことなく、その心が理解して立ち帰ることのないためである」。だが彼(主)はそれ(民)を癒される」となる。そして、9-10節全体は、<頑迷預言>ではなく、<救済預言>となっていると、上村は考えている。さらに論を進めて、彼は、マソラ本文の末尾 **לו ונפנ** は明らかに付加であり、むしろ **לו ונפנ ושב** 全体を後世の付加と考えたいとする。その理由は：

1. この部分がなければ主の言葉は「聞く、見る、理解する」という語が10節の前半と後半でキアスムスになる。

2. イザヤは民の立ち帰りを期待しているので、マソラのように「立ち帰ることのないように」とは考えがたい。

3. 立ち帰り癒しは19・22にセットで現れており、後の挿入者がそこから取り入れた可能性がある。したがって、イザヤの元来の預言は「彼らの心が理解しないために」で終わっていたということになる —

ということであるが、どこまでが付加であったにせよ、末尾の「癒し」に関する部分が元来のテキストになかったならば、確かにイザヤの元来の預言は<頑迷預言>

であったと言える。しかしながら、民の癒しを含む現テキストは、それが後の付加であれ元来のものであれ、〈救済預言〉となっていること、そしてそのテキストが伝統的に受け継がれてきたという事実が重要であると、上村は考えている。そして、〈救済預言〉としての読みが、70人訳や後のラビ文献でも支持されていることを、彼は示している²⁶⁾。この、**לֹא יָשׁוּב וְרָפָא לוֹ**全体を付加と考える根拠として上村が挙げている理由は、関根清三によって次のように反論されており、関根はまず**לֹא יָשׁוּב וְרָפָא לוֹ**をひとかたまりにして、**יָשׁוּב**を条件文に、**לֹא יָרָפָא**をその帰結文に取るには、**וְרָפָא**の **ו** が邪魔であり、並列された三人称男性単数の完了動詞の主語を「民」と「主」に読み替えるという難点が大きい。しかも、マソラでは**יָשׁוּב**で切って読むように記号で指示してあるのだが、そのことも、元来**לֹא יָרָפָא וְיָשׁוּב**全体が付加であったなら、説明がつけづらいとして、上村の上記の議論に反論している。

上の **ו** については、**לֹא יָרָפָא**がなければキアスムスになるというが、不具合があり、しかもその前後が整然とした詩文ではないので、ここだけキアスムスを読もうとしてもあまり意味はない。

2. 「イザヤは民の立ち帰りを期待している (3:6)」と言うが、これは、私 (関根) のように、イザヤの期待と、それに対する神の禁止がイザヤ書を貫くテーマと解する限り、むしろ **לֹא יָרָפָא**をイザヤに帰する傍証になる。イザヤ9:12, 10:21, 22でも民の立ち帰りが期待されているが、それが外れるところにイザヤの悲劇がある。

3. 「立ち帰り癒しは19章22節にセットで現れており、後の挿入がそこから取り入れた可能性がある」と言うが、可能性は逆でもある。また、立ち帰りと癒しがセットで現れているのは、それがイザヤの関心だったからでありうる。また、このセットはホセア6:1、エレミヤ3:2, 7:14などもそうで、珍しい発想ではない。イザヤ自身もそういう発想をしたとして不思議はない。

4. **רָפָא** を再帰的に取ることは難しいと言う、上村の論は聖書中限られた数のカルの用例では断定できない。ニファルやヒットパエルを使わずに再帰を表わすか否かは著者の文体や趣味の問題である。

5. 「癒す」を非人称と取るのは難しい、なぜなら「聖書における癒し手は神の他にはない」から、と言うのは正しい。しかし、それは、受動態の「癒される」が誰によってかが、あまりに自明なので省略するということを意味する。しかし、たしかに、癒しの行為者を民と取って、民が自分で「理解し」「認識して」「立ち帰った」つもりになり、その立ち帰りを盾にとって神の癒しと救いを我が物とすることがないため、神に代わって自分らを癒せるかに思う「高ぶり」(9:8)を禁止しているとも読めるかもしれない²⁷⁾ というような、意見が出されている。しかし、その批判に対して上村はさらに答弁しており、**וַיִּשָׁב** を条件文と取り、**לֹא יִרְפָּא** をその帰結文と取るのに **י** は余計どころか、**י** をつけることによって、ヘブライ語のヴァヴ継続法、すなわち **י** (ヴァヴ) のあとに動詞が直接続く場合、それが完了形の動詞ならば未完了形の意味になり、未完了形の動詞なら、完了形の意味になるという用法によって、時制が転換されており、その、時制の転換は話法の転換を示すことでもある、それゆえ、**לֹא יִרְפָּא וַיִּשָׁב** のところは、それ以前の3つの動詞(見る、聞く、理解する)が未完了で統一されているのと異なり、その違いは、母音符号(句読点)のなかったテキストの読みとして、話法の転換を表わすと見ることが妥当であろうと、自説をさらに裏付けている。並列された完了動詞の主語を「民」と「主」に読み替えることも、よくある用法であって、同様に「立ち帰り」と「癒し」が同時に現れるイザヤ書(19:22)でも起こっていると指摘している。この話法の転換によって、上村は **לֹא יִרְפָּא וַיִּשָׁב** を著者が直接読者に語りかける挿入句と読み、マソラが **וַיִּשָׁב** と停止形にしてここで切ったことについては、後代の付加と考えない限り説明しがたい三人称単数能動態の **רָפָא** を解決して、**לֹא יִרְפָּא** を神のせりふの外に出すためであると、論じている²⁸⁾。10章のキアスムスについては、前半が「心、耳、目」が後半に「目、耳、心」の順で現れ、9節の「聞く、理解する」、「見る、認識する」が、10節の、「目、耳、心」のキアスムスに収斂するのであって、これは、「整然としたキアスムス」であると、読んでいる。その他の点でも、上村論文は、関根論に答えている²⁹⁾ が、それを個々に取り上げてどちらが正しいか論じるだけの力も資格も、私にはまったくないので、ここではもうこれ以上は立ち入ら

ないが、少なくともこの箇所について、救済の可能性を暗示するものとして理解する解釈が伝わっていたということは重要であろう。捕囚からの帰還の後、イスラエルの民は、神に立ち帰れば救いはあるという希望を取り戻したのではないだろうか。そして、それが、イエスの時代にまで続いていると考えることができると考えられよう。

そのように考えて、ギリシア語の本文に戻ると、大貫隆が以下のように指摘していることが正しく思われる。その指摘を要約すれば、

ἵνα は συνιῶσιν までを包括する。続く μήποτε は、蓋然的な推量を表す接続詞と取れる。結論として、12節の訳は、

それは

「彼らが見るには見るが、認めず、

聞くには聞くが、理解しない」ようにするためである。

「あるいはおそらく彼らも立ち帰り、ゆるされるかもしれない」

となる。なぜならば、エレミアスが指摘するように (J.Jeremias, *Die Gleichnisse Jesu*, 10.Aufl. Göttingen (1984), 11f)、μήποτε に対応するアラム語の dilemma' には(1)「……しないように」(否定の目的文)のほかに、(2)「あるいはひよっとすると……かも知れない」(蓋然的推量)、さらに(3)「もし……でなければ」(例外の想定)の意味が可能である。ただし、エレミアスはそこから、この(3)の意味がマルコ福音書4:12の背後のアラム語伝承における意味であったと考え、イザヤ書6:9-10の引用部分を「彼らを見るには見るが、認めず、聞くには聞くが、悟らないであろう、もし彼らが悔い改め、神が彼らをゆるさないならば」と訳すが、むしろ2の意味が支持される。エレミアスは、自分の訳の根拠として、2世紀以降のユダヤ教ラビ文献における、タルゲームの同じ箇所イザヤ6:9-10解釈を上げているが、エレミアスが指示するラビ文献(シュトラック/ビ

ラーベックの注解に集められたものである) ではないずれの例も、エレミアスの考える(3)の意味ではなく、むしろ(2)の意味で訳されている。さらに、ヘレニズム期のギリシア語(コイナー)で μήποτε に(3)の意味(例外の想定)をもたせるのは困難であり、新約に用例もないが、(1)と(2)の意味は、新約聖書には多く見られる。そう考えると、問題のマルコ4:12は、(2)の意味であろう。

マルコ4:12の μήποτε の意味を確定するのに、マタイ13:15とルカ8:10の並行記事は役に立たない。マタイは70人訳イザヤ書6:9b-10にほぼ完全に一致する形で引用しなおしている。その結果、文中の μήποτε の位置がマルコ4:12と異なっており、誤解の余地なく(1)の意味(否定の目的文)となっている。ルカは8:10では、該当するマルコの語句を削除してしまった。その代わりに、彼は使徒言行録の結び(28:27)のそれを置いている。その文言は、マタイの場合と同様、ほぼ正確に70人訳のイザヤ書6:9-10に合致させられている³⁰⁾。

この解釈がふさわしい理由として、さらに、このように考えたほうが、他の箇所 of イエスの言動と、符合するというこゝもあげられよう。マルコの同じ章に、「イエスは、人々の聞く力に応じて、このように多くのたとえで御言葉を語られた。たとえを用いずに語ることはなかったが、御自分の弟子たちにはひそかにすべてを説明された」(マルコ4:33-34)とある。「人々の聞く力に応じて」ということは、人々に分かりやすく、という意味であろう。

あるいは、仮に、μήποτεが12節の最後まで支配するとして、「『彼らが見るには見るが、認めず、／聞くには聞くが、理解できず、／こうして、立ち帰って赦されることがない』／ようになるためである」という意味になるとしても、イエスの聞き手が、立ち帰ったときには許されるというメッセージを言葉の裏に聞き取ったことは想像に難くない。なぜなら、この「立ち帰って」という言葉ἐπιστρέψωσινは、イエスの言葉で通常「悔い改める」という文脈で用いられるμετανοέωと異なっており、そのことから、これがイザヤ書からの引用であることが目立って明らかであるから、イザヤ書の文脈を知り尽くしていた聞き手、あるいはマルコの読者は、すぐに、

その先の部分までを思い出すに違いないのである。イザヤ書の、当該の引用箇所が続く部分では、破局に続く立ち帰りと救済の可能性が、はっきりと、しかも印象的に記されており、それが語られなくても、聞き手にはすぐに連想されるはずである。

6:11 わたしは言った。「主よ、いつまででしょうか。」主は答えられた。「町々が崩れ去って、住む者もなく／家々には人影もなく／大地が荒廃して崩れ去るときまで。」

6:12 主は人を遠くへ移される。国の中央にすら見捨てられたところが多くなる。

6:13 なお、そこに十分の一が残るが／それも焼き尽くされる。切り倒されたテレビンの木、樅の木のように。しかし、それでも切り株が残る。その切り株とは聖なる種子である。

イスラエルの歴史において、どれほどに民が神から離反して絶望的な状況に瀕しても、つねに、神に従い救われる「残りのもの」がいた。そして、イエスの言葉を聴く者も、その「残りのもの」になることを、求められている、ということではないだろうか。12節のイエスの言葉は、イザヤ書を精通しているものの耳には、「私が譬えで語るのは、イザヤが、『彼らが見るには見るが、認めず、／聞くには聞くが、理解できず、／こうして、立ち帰って赦されることがない』／ようになるためである」と預言したとおりにあなたたちの心が暗くなっているが、それでも、立ち帰ることができるようにである」という意味に響いたと、考えられるであろう。そのように、イエスの喩えは、聞き手に決断を迫る、召し、挑戦的な呼びかけとして働いている。

V 結 び

上記の考察から、イエスの福音宣教がユダヤ教の人々、特にファリサイ派の人々

や律法学者たちに対しては閉じられていたという読みが、素朴な解釈によれば成り立たないということが明らかであろう。そうしたキリスト教排他主義的な教義は、後世の誤った付加物として捨てられなければならないという認識は、正しいことが裏付けられた。イエスの死の責任についても、たしかに、イエスの福音を信じないで、イエスを十字架につけた者は、その死に対して責任があるが、しかしそれは、民族的にユダヤの人々が負うべき責任ではない。むしろ、イエスは、彼らに対しても福音を宣べ伝えていたこと、福音を身近に宣べ伝えられていたまさにその人々が（イエスの12弟子たちも、イエスを見捨てて逃げた点では、ただ刑死を見ていた他の群集と同じである）、イエスを殺したということを個人的なレベルで受け止めるべきである。換言すれば、イエスが福音をもたらし、また、贖った対象であるそのひとりとして、キリスト教徒も、イエスを十字架につけた者たちの子孫であり、今生きているユダヤの人々と同じくらい、責任があると、言えるかもしれない。ユダヤの人々を迫害する人々は、ユダヤ人とその他の民族との間に境界線を引いて、ユダヤ人たちをキリストの死に対して有罪の側に入れ、その外側を無罪のように考えてきた。しかも、都合よく、その死の贖いは自分たちの罪のためであるとしている。これは、矛盾である。イエスの裁判に直接関わらなかったユダヤ人は、私たち日本人と同様、あるいは、少なくとも、私たちと同じくらいは、イエスの死に対して責任を持たない。（きっと、1世紀、エルサレムから遠くに住んでいたユダヤ人にイエスの死の責任を問えば、自分とは何の関係もない話だと答えたであろう。）また、逆に、もし、彼らにイエスの死の責任があるとすれば、同じ意味で、私たちでさえも、今生きているすべてのユダヤ人と同じくらいは、イエスの死に関わっているのである。彼らとキリスト教徒は、やはり、同じ神を信じる者として、イエスのメシア性を信じる信じないという大きな違いはあっても、兄弟であると考えerほうが正しいのではないだろうか。イエスは、ユダヤ人としてユダヤ人のなかで宣教した。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところには遣わされていない」（マタイ15：24）という言葉さえ残っている。しかしそれでも、当時ユダヤ人に忌み嫌われていたサマリア人（ルカ17：16、ヨハネ4：2-16）や異邦人、シリア・フェニキ

アの女（マルコ7：24-30）にも救いをもたらしている。彼の救いや宣教は民族的なレベルではなく個人個人のレベルでなされた。ファリサイ派の人々も、律法学者も、むろんユダヤ人一般の人々も、イエスの宣教の対象からはずしてはみることは間違っているであろう。彼らがイエスをメシアと信じてキリスト教に改宗したかユダヤ教にとどまったかということは、また、別問題である。また、彼らがユダヤ教の正しいあり方に立ち帰って救われた可能性も否定できない。イエスは十字架につけられたときに、自分の磔刑を支持した人々のためにとりなしの祈りをしている（ルカ23：34）。最後までイエスが彼らのためにも祈っていたことだけをわれわれは知っているのみである。

注

- 1) Helen P. Fry, "Anti-Semitism," *Christian-Jewish Dialogue: A Reader*, Compiled and ed. by Helen P. Fry (Exeter: Univ. of Exeter Press, 1996), p.17.
- 2) From Declaration on the Relation of the Church to Non-Christian Religions, ' *Nostra Aestate*, 28 October 1965, quoted in " *Christian-Jewish Dialogue*, Compiled and ed. by Helen P. Fry, p.37.
- 3) cf. Henry George Liddell & Robert Scott, *Greek-English Lexicon*, 9th ed., rev. with a revised supplement by Henry Stuart Jones (Oxford: Oxford Clarendon Press, 1996).
- 4) 大貫隆『マルコによる福音書I』（リーフバイブルコメンタリーシリーズ）（日本基督教団出版局、1993）、p.50.
- 5) Liddell & Scott, *Greek-English Lexicon*, Abridged Edition (Oxford: Oxford Clarendon Press, 1986).
- 6) 目が不自由に生まれついた人について、イエスの弟子たちでさえ、「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」と質問している記録がある（ヨハネ9：2）
- 7) 阪口吉弘『ラビの譬えイエスの譬え』（日本基督教団出版局、1992）pp.178-179.
- 8) ルカで続いて、「しかし、富んでいるあなたがたは、不幸である、／あなたがたはもう慰めを受けている。今満腹している人々、あなたがたは、不幸である、／あなたがたは飢えるようになる。今笑っている人々は、不幸である、／あなたがたは悲しみ泣くようになる。」（6：24-25）とある箇所は、続く愛敵の教え、特に、「いと高き方は、恩を知らない者にも悪人にも、情け深い」（6：35）という言葉などとも矛盾し、イエスの言葉というよりも、ルカの挿入ではないかと思われる。
- 9) "Guidelines and Suggestions for Implementing the Conciliar Declaration *Nostra Aestate*," 1974, quoted in Helen P. Fry ed., *Christian-Jewish Dialogue*, pp.150-151.
- 10) ゲルハルト・フリードリヒ監修『NTD 新訳聖書註解 4 ヨハネによる福音書』松田伊作訳（NTD 新訳聖書註解刊行会、1975）、pp.231-233、その他、この箇所については、F.V.フィルソン『ヨハネによる福音書』（聖書講解全書19）金井輝夫訳（日本基督教団出版局、1967）、pp.136-138；J.カルヴァン『カルヴァン新約聖書註解Ⅲ ヨハネ福音書上』山本功訳（カルヴァン著作集刊行会、新教出版社、1963）；ウィリアム・パークレー『ヨハネ福音書下』柳生望訳（ヨルダン社、1968）、pp.10-18；G.S. スローヤン『ヨハネによる福音書』（現代聖書注解）鈴木修平訳（日本基督教団出版局、1992）、pp.184-185；*The New Interpreter's Bible, Vol.9 The Gospel of Luke* (Abingdon Press, 1995), pp.628-630；ゲイル・R.オデイ「ヨハネ福音書」C.A.ニューサム、ゲイル・S.H.リンジ編『女性たちの聖書注解』加藤明子、小野功生、鈴木元子訳（新教出版社、1998）、p.509等を参照した。
- 11) ブルース・マリーナ、リチャード・ロアボー著『共観福音書の社会科学的注解』大貫隆監修、加藤隆訳

(新教出版社, 2000)

- 12) ゲイル, R.オデイ「ヨハネ福音書」C. A. ニューサム, S.H.リンジ編『女性たちの聖書注解』加藤明子、小野功生、鈴木元子訳 (新教出版社, 1998)、p.509.
- 13) Walter Bauer, *Greek-English Lexicon of the New Testament and other Early Christian Literature*, 3rd ed. Rev. ed, Frederick William Danker (Chicago: Univ. Chicago, 2000).
- 14) D. R. ヘア『現代聖書注解 マタイによる福音書』塚本恵訳 (日本基督教団出版局, 1996), p148.
- 15) D. R. ヘア『現代聖書注解 マタイによる福音書』, p.148.
- 16) フェミニスト神学からは、次のような指摘がある。
彼女らが(依然として)「持ち物」を持っていたということは、極貧の者ではないことを意味している。彼女らはルカの心のなかでは弟子でもないのである。なぜなら、弟子たちは「すべて」を売り払い貧しい人々に分け与えるように要求されているからである。(18・22、14・33)。従ってその女性たちは貧しい人々(弟子たちとイエス)を助けているように描かれているが、彼らの階級の外部からのパトロンとしてなのである。……女性が支援し、男性が指導する組織というルカの描写は、多くのキリスト教組織において何世紀にもわたり忠実に模倣されてきたのである。(ジェイン・シェイバーク『ルカ福音書』pp.470-501. C・A・ニューサム/S・H・リンジ編『女性たちの聖書注解』, p.493.)
- 17) Eugene Fisher, from "Faith Without Prejudice" (Crossroad, 1993), pp. 47-49, quot. in *Christian-Jewish Dialogue*, ed. by Helen P. Fry, p.181.
- 18) Joachim Jeremias, *The Parable of Jesus*, 1954; revised 3rd ed. (SCM Press, 1972), p.145.
- 19) Jeremias, *The Parable of Jesus*, p.38.
- 20) ウルリヒ・ルツ (Ulrich Luz)『EKK 新約聖書注解1/3』小河陽訳 (教文館, 2004) pp.170-191.
- 21) A. J. ヘッセル『人間を探し求める神: ユダヤ教の哲学』森泉弘次訳 (東京: 教文館, 1998), p.357.
- 22) 『新共同訳新約聖書注解 I』(日本基督教団出版局, 1991), pp. 123-124.
- 23) ウルリヒ・ルツ (Ulrich Luz)『EKK 新約聖書注解1/3』小河陽訳 (教文館, 2004), pp.170-191. D. R. A. ヘア『現代聖書注解マタイによる福音書』塚本恵訳, pp.400-401、『新共同訳新約聖書注解 I』(日本基督教団出版局, 1991), pp.123-124.
- 24) Jeremias, *The Parables of Jesus*, p.15. エレミアスは、1)「彼らが見るには見るが、認めず、／聞くには聞くが、理解できず、」にあたる部分が、ヘブライ語聖書と70人訳は二人称動詞を用いているがマルコとタルグムは三人称になっていること、2) 12節で、ヘブライ語聖書と70人訳は、「癒す」を用い、単数形の *lo* を用いているところを、マルコとタルグムは、「癒す」のかわりに「赦す」を用い、単数形 *lo* のかわりに複数形を用いていること、3) マルコもタルグムも、神の名前の使用を避けるために受動態を用いていること、をあげている。
- 25) 上村静「イザヤ書6章9-10節 — 頑迷預言?」『聖書学論集34』(日本聖書学研究所, 2002), pp.23-67.
- 26) 上村「イザヤ書9章9-10節 — 頑迷預言?」, p.29. 上村は、LXX の μήποτε ἴδωσιν τοῖς ὀφθαλμοῖς καὶ τοῖς ὠσὶν ἀκούσωσιν καὶ τῇ καρδίᾳ συνώσιν καὶ ἐπιστρέψωσιν καὶ ἰάσονται αὐτούς を、「それは彼らが自分の目で見ることなく、自分の耳で聞くことなく、自分の心で理解することなく、立ち帰ることのないためである。だが、私は彼らを癒すだろう」と訳す。「しないように」という意味の μήποτε は、直説法を取ること、接続法をとることもあるが、ここでは「癒すであろう」ἰάσονται と直説法が用いられており、そのことは、この語が μήποτε に支配されるのではなく、主文に戻ることが支持しており、神自らが、私は彼らを癒す、と言うことになるからである。
- 27) 関根清三「イザヤの頑迷預言をめぐる覚書 — 拙訳の論評にお答えしつつ — 」『聖書学論集34』(日本聖書学研究所, 2002), pp.69-88
- 28) この点は、前出「イザヤ書6章9-10節 — 頑迷預言?」p.29. にある。
- 29) 植村静「『頑迷預言?』再び — 関根清三への応答 — 」日本聖書学研究所例会2003年9月22日発表およびレジュメ。
- 30) 大貫隆『マルコによる福音書 I』(リーフバイブルコメンタリーシリーズ) (日本基督教団出版局, 1993), pp.236-240.